

学位論文要旨

被差別部落当事者による自己表現に関する研究

広島大学大学院教育学研究科  
教育学習科学専攻 教科教育学分野  
国語文化教育学領域

学生番号 D192937 氏名 後藤田和

本論文は、被差別部落当事者による表現活動について、その歴史の一端を掘り起こし、そこに蓄積されてきた作品や表現者たちの可能性について検討するものである。この作業を通じて、これまで顧みられることのなかった被差別部落当事者たちがどのように部落と向き合い、差別と向き合い、自己を向き合ったのかを明らかにすることを最大の目的とする。

そこで、本論が研究対象とするのは、これまでの研究で議論されることのなかった土方鉄や岡田ます枝、下原温子、そして文芸誌『革』創刊に関わった人々たちの表現と運動である。

本論文の指す「被差別部落当事者」とは、分析の対象とする表現者だけではなく、彼ら／彼女らと関わりをもったり、彼ら／彼女らの表現を受け取ったりした人々をも射程に含めた対象であることを明記しておく。

むろん、その場合において先行研究の蓄積が豊富な野間宏や住井すゑ、中上健次といった作家たちも「被差別部落当事者」であることに違いはない。ただし、ここで強調しておきたいのは、本論文で対象とする「被差別部落当事者」が「作家」として活動した人々だけではない、という点である。彼ら／彼女らは被差別部落と向き合いながら自己や部落問題を見つめ直し、自己を表現することによって部落を問い直そうとした書き手である。そういった書き手の声に耳を傾けることで、既存の枠組みを再構築し、新たな表現の可能性を提示できると考えている。

また、本論文における「自己表現」について、論者の認識を示す。「自己表現」は辞書的に説明すれば、自分の内にあるものを別の形にして外部化することを意味する。そこにはもちろん日常会話なども含まれるわけだが、本論文では特に、自分の考えや感情などを反映させた作品を作ること、つまり文学作品を主な分析の対象として、そこで「自己表現」がどのように行われているのかについて追究していく。もちろんその際、文学作品という形で表現することができなかった、あるいは表現しなかった被差別部落当事者の存在も念頭に入れつつ、被差別部落当事者が自己の体験や考えをいかに文学作品へと投影していったのかに注目する。特に本論文第七章で対象としている識字学級に通って文字を学びながら表現行為を行った部落女性たちに見られることであるが、被差別部落当事者にとって「書く」という行為それ自体がさまざまな要因で容易にできなかった。そうした被差別部落当事者による表現活動には自己の体験や経験に根差した表現が多くを占める。本論文では小説や詩、戯曲といった文学作品を主な研究対象としているが、そうした文学作品には少なからず作者である被差別部落当事者による体験や経験に根差した表現を読み取ることができる。したがって、対象とする被差別部落当事者による文学表現から読み取ることのできる彼ら／彼女らの表現もまた、「自己表現」と解釈し、作品の分析にあたることとする。

以上を踏まえ、本論文では以下の研究課題を設定する。

- ① 被差別部落当事者による自己表現を明らかにする。
- ② 被差別部落当事者による自己表現が部落解放運動とどのように関わるのかを明らかにする。
- ③ 被差別部落当事者による自己表現が公共性を獲得する可能性を示す。

なお、これら三点の研究課題は後述する三部構成すべてに共通する課題であり、論文全体を通じて明らかにしていくこととする。

第一部では部落解放運動のなかでさまざまな葛藤にさらされながら、ひたむきに表現活動の重要性を説いた土方鉄という一人の運動家・作家を研究対象として、彼の創作における自己表現について明らかにした。

第一章では、土方の創作の出発点である俳句と詩に関する分析を行った。彼の創作は結核療養に関する俳句から始まった。それとともに終戦後の部落解放運動の再建・盛り上がりに応ずるように参入し、サークル文化運動にも参加していく。『地ぞこからのうたごえ』（1952）に寄稿された彼の詩は当時の共産党綱領のアジテーションとして表現されることとなるが、それは彼自身の体験や経験に即した表現とは異なる表現であったと言える。

俳句と詩の比較検討から、自身の療養に関することや、自らの生きてきた部落、目にしてきた部落の人々を詠む主体と、当時の反戦平和運動の力学に翻弄される主体という揺れが浮き彫りとなる。こうした表現の揺れは、1950年代前半という複雑な社会状況の中で、自身の問題意識にある表現と運動の要請する表現とが入り混じり、それらを整理しきれない土方の姿が浮かび上がった。

第二章では、俳句や詩といった短い形式では表現しきれないという思い、そして『破戒』を超える作品を書きたい、書かねばならないという思いから、韻文から散文へと創作の場を変えた土方の代表作と言える小説「地下茎」（1961）を研究対象とし、そこで描き出される部落の人々の〈歪み〉を明らかにした。それまでの部落問題を扱った小説が、部落の人々を誇張された人物像として描かれてきたこと、あるいは部落の人々の肯定的な側面のみを描き出すことに注力されてきたことに批判的な態度をとる土方は、否定的な部落の人物像を描出していった。

そうした人物像を描き出すために、彼は作品連載中に語り手をどのように設定するのかを模索し、「語りの実験」を行っていった。この過程において土方は語り手という存在をどのように配置するのかを最大の問題としていた。それはつまり、部落の人々、そして部落に生まれ育った自己をいかに表現として導出するのかという問いと重なり合う。そのとき突き当たるのは他者から見られる自己をどのように表現するのかという問題である。「地下茎」で描かれる部落の〈歪み〉は母のお牧を象徴として描き出されているが、その母を眼差す息子や娘の視点、そして、母が眼差す息子や娘の視点を表現する必要があった。初出連載時の「語りの実験」はそうした語り手の複数性を示そうとした、あるいは結果として示してしまったものとして捉えることができ、そこにこそ土方にとっての「地下茎」という作品の重要さがあると言える。

第三章では、小説から戯曲へと創作の場を移した土方の創作「殻をぬいだでんでん虫」（1967）と「闇にただよう顔」（1969）を分析対象とし、彼の描き出そうとした部落の表現と運動から求められる表現について明らかにした。一作目の「殻をぬいだでんでん虫」では「蒸発」をテーマとしながらもその裏テーマとしての「部落」という主題が表現手法や場の設定などから浮かび上がること論じた。能や狂言といった伝統芸能や「鴨川」というモチーフを織り交ぜることによって、観る側にとっては「部落」を想起させる意図が働いていたと言える。さらに、「老婆」によって象徴的に語られる「鴨川」が、本作品では最終的に行政、つまり政治権力の美化政策によって排除されること意味に目を向けると、同時代的な部落の「共同体の崩壊」という問題が浮かび上がってくる。一九六五年に同和対策審議会答申が出され、部落解放運動の高揚期にあたるこの時期、急速に進められていく住環境の整備によって、部落の人々はもともとの住居から団地やア

パートに移り住むようになり、それまでの家と家とのつながりが解体されていった。「殻をぬいでんでん虫」では、そうした問題をも含み込みながら土方の当時の部落に対する問題意識を如実に反映した作品として描かれたと言える。

一方で、第二作目の「闇にただよう顔」では、狭山裁判を題材とし、舞台を法廷として設定し、裁判記録に基づくような問答が行われている。そのため、「部落」というテーマが前面に押し出されるとともに、狭山事件のあらましや、裁判での司法権力の不当さを訴えかけるような表現が多くなされている。それは、満を持して部落を主題とした戯曲を作る土方の意欲的な表現であると同時に部落解放運動が求める表現であったともいえる。ただし、土方はここでも自己の問題意識を反映させるかのように、第一作目で登場させた「老婆」の設定を引き続き踏襲しながら裁判記録にはない創作の部分を描き出そうとした。しかし、それが第一作目よりも効果的に働いてはいないと言える。土方自身そうした創作の部分に力を入れたことを述べてはいるが、それと同時に運動側から求められる表現と自己が描き出したい表現との間で葛藤を抱えていたことが語られている。そうした葛藤は土方自身の言だけではなく、作品の表現からも見いだすことができる。

第四章では、土方の実体験に基づいて書かれた詩「病床断片 I・II」(1982) および小説「妣の闇」(1990) を分析対象とし、彼にとって「書くこと」とはどのような営みであったのかを明らかにした。これらの作品は甲状腺全摘、声帯の神経一部摘出、右リンパ腺摘出、気管切開という大手術を受けることとなった療養の体験が執筆の経緯となっている。10代の頃から結核を患い、病と隣り合わせだった土方にとって、生と死という問題は非常に大きな問題関心であったと言える。さらに、これらの作品の土台には療養中に土方がつけていた日記の存在が明らかになっており、日記をつける→詩を書く→小説を書くという創作の段階があった。「妣の闇」では、こうした療養している自分と日記をつけているときの自分、そして現在の自分を語り手ベースで書き分けており、そこには繰り返し自己を再構成し、生成していく過程が読み取ることができる。

また、作品では病に関する記述だけではなく、1980年代当時の部落解放運動で巻き起こっていた北九州土地ころがし事件などの汚職事件などに関する新聞記事の挿入やそれに対する語り手の悲嘆が描かれている。病と向き合い、自己と向き合うなかで土方にとってやはり部落解放運動が大きな位置を占めていたことは想像に難くない。病と向き合う自己や運動の腐敗を嘆く自己といったさまざまな自己を表現していった本作品からは土方にとって「書くこと」というのはある種の「使命感」として認識されていたと言える。

第二部では、被差別部落当事者の中でもとりわけ女性たちに焦点を当て、1950年代から1970年代までの時期において彼女たちが部落解放運動内部でどのような立ち位置にあったのか、そして彼女たちの創作においてどのような自己表現が見いだせるのかについて分析した。

第五章では、1950年代の部落女性が部落解放運動でどのように捉えられていたのか、そして当時高校生だった重岡洋子、および群馬県の主婦・岡田ます枝の表現の可能性を明らかにした。1950年代における部落解放運動では、女性差別の撤廃や家庭内の民主化をかかげながらも、男性を中心とした男性優位の思想が根底に残り、その中に女性を位置づけるという矛盾があった。そうした中で、雑誌『部落』の誌面上では、部落女性による小説や詩などの創作が掲載されており、とりわけ注目されたのが、重岡洋子による小説「日蔭」であった。本作品に対する批評が『部落』で小特集として組まれたが、「日蔭」へのコメントが男性と女性ではっきりと分かれていた。男性批

評家3名は、作品内容は未熟なものの、部落の女性がこうした小説を「書くこと」自体を肯定的に評価した。それに対して、唯一女性の立場から批評した岡田ます枝は、本作品の結末部において、部落解放は「日本民族の解放より外ない」という当時の共産党綱領のアジテーション的な表現を真っ向から否定し、作中人物である部落出身の女子高生の「家庭の状態が全然わからず、「恵まれ過ぎた高校生」として描かれていることに、違和感を示した。

岡田は群馬勤労者集団というサークルに所属していたサークル詩人であり、彼女の代表詩「重たいふとん」は土方も詩を寄稿していた『地ぞこからのうたごえ』に掲載され、『部落』誌にも転載されることとなった。それらの詩作からは党派的、政治的言説にからめとられることなく、自らの環境や生き方から自然に表現された部落女性像が読み取ることができる。

さらに、岡田の詩が掲載された『地ぞこからのうたごえ』には多くの部落女性の詩が掲載されているのが特徴的で、なかでも中学3年女児の泉君子による「けんか」では、一見父親による家族への暴力、すなわち加害者としての側面が語られているように読み取れるが、その父親もまた、部落に生まれたことによって差別された被害者としての側面もあったことを表現している。泉が提示した加害の可能性を持つ者が被る、被害への視点は、当時の部落解放運動を取り巻くジェンダー体制を相対化する可能性、すなわち「虐げる男性／虐げられる女性」という対立構造にも揺らぎを与える可能性を持っていたと言える。

第六章では、1959年1月に雑誌『部落』で連載が始まった住井すゑの『橋のない川』と、同時期に毎月のように『部落』に詩が掲載されていた下原温子の表現を分析対象とし、60年代における部落問題を主題とした文学作品に描きだされた被差別部落女性像と、被差別部落女性自身が表現した部落女性像の差異を明らかにした。

『橋のない川』は1990年まで書き継がれ、累計約800万部のベストセラーとなった。しかし、近年の研究で『橋のない川』で描かれる部落女性たちは、男性中心主義的眼差しによって描かれており、ジェンダー規範を内面化しているという批判や、作中の時代設定が1920年代であるにも関わらず、作品執筆当時の1960年代の言説が反映されているという批判も出てきた。

論者自身もそうした批判に同意するが、『橋のない川』をテキスト分析のみによって批判するだけでは不十分であるという考えから、当時の住井を取り巻くコンテクストとしての部落解放運動や部落女性自身の表現との関係性を明らかにした。

そこで注目したのが、山口県のサークル「駱駝」に所属していた下原温子である。下原の詩はサークル誌『駱駝』から『部落』へと度々転載され、多くの読者がいたにもかかわらず、その表現が取り上げられることはこれまでなかった。下原は部落解放運動とは一定の距離を置きながら、同人で先に部落に関する表現活動をしていた丸岡忠雄に影響を受け、彼女自身の恋愛や結婚、家庭に関する詩を表現していった。彼女が描き出す部落女性像は常に男性視点を内面化してしまう女性像なのであるが、そこには運動の言説では登場しない、自身の出自に関して語りたくても語ることでできない部落女性という立ち位置があった。こうした男性視点の内面化を受けた部落女性像が下原によって表現される一方で、『橋のない川』では部落男性である誠太郎の視点から部落出身であることをことさらに露悪的に否定するという屈折の中に、被差別部落女性があることが表現されていた。下原の表現を読み解くことによって、そうした当時の部落の人々の中にあるジェンダー規範の内面化の問題がくっきりと浮かび上がるのである。『橋のない川』の部落女性像や

や運動に参画していた女性たちの声といった一面的な部落女性像を相対化する表現として下原の詩は位置づけられるだろう。

第七章では、1970年代の部落女性の表現として、識字学級に通っていた部落女性たちが創作した詩を分析対象とし、これまでの研究では識字運動によって文字を獲得した部落女性が多く作品を世に送り出した、という「数」としての評価がほとんどであったことを踏まえ、部落女性たちのひとつひとつの詩の表現をじっくりと読み解き、その可能性について明らかにした。

1970年代に入り、部落女性たちは部落解放運動に積極的に参入していくようになり、それまで差別の経験や感情を沈黙させられてきた彼女たちは、部落解放全国婦人（女性）集会で声を発するようになっていった。こうした部落女性たちの声は討議資料や大会の記録などからひろいあげることができ、彼女たちの主張からは部落男性を加害者、部落女性を被害者といった二項対立的な語りを強調するものが多くを占めていた。しかし、本章で対象とする識字学級に所属していた阪本ニシ子・みずた志げの詩には、部落男性たちもまた、差別によって虐げられてきたのであり、それを妻や娘といった部落女性が語るといった加害と被害という単純な二項対立の図式を崩すような表現を見出すことができる。運動の言説や「記録」からでは読み取ることのできない部落女性の抱えていた複雑な状況が、阪本やみずたの詩からは浮かび上がってくる。

第三部では、「公共性」という鍵概念を手掛かりに部落解放運動における文化活動の運動がどのように位置づけられるのかについて明らかにした。アジア・太平洋戦争を経て、いち早く再建にのりだした部落解放運動は、それまで当然のように残っていた部落差別の不当さを世に問い直そうとし、国家を巻き込むほどの盛り上がりを見せる。それは部落解放運動そのものがそれまでの日本社会における公共性を問い直す営みであったことを指し示している。しかし、部落解放運動は一枚岩的な組織ではなく、1960年代後半頃になると、特に日本共産党との関係が悪化し、組織は分裂状態になっていく。そうした複雑なイデオロギーの対立がある中で、部落の文化活動もまたその影響を受けていた。運動にとって有用な文学が求められる状況下でも、部落の人々の表現の場の創出することを土方には模索していく。その営みには、部落解放運動という公共空間の中において、部落の文化活動という新たな公共空間を生み出していこうとする意図があったと言える。この点に関して詳述する。

第八章では、1960年代から1970年代にかけて、部落解放運動が盛り上がりを見せながらも政治的な分裂を起こしていく混乱のなかで、文学や文化活動がどのように捉えられていったのかについて整理する。この時期の文学や文化活動の言説は、常に政治的なスタンスが問われながら述べられたものが多く、そうした政治的対立などを客観的に整理されることはほとんどなかったと言える。このことについて、本章では、運動の分裂を客観的に整理したうえで、そこでの文学や文化活動がどのように位置づけられるのかを検討した。

第九章では、1975年に野間宏を議長にして結成された「差別とたたかう文化会議」の機関誌『差別とたたかう文化』および、部落解放運動における文化活動の推進に大きな役割を果たした土方鉄を中心に発刊された文芸季刊誌（現在は文芸誌）『革』の運動に焦点を当てた。そこで、「公共性」やアメリカの政治学者ナンシー・フレイザーが提唱した「ニーズ解釈の政治」という理論的な枠組みを援用し、その枠組みで部落解放運動を捉えることによって、これまでの部落解放運動史から零れ落ちてきた部落解放運動をめぐる文化活動の重要性や可能性を明らかにした。

部落解放運動における文化活動は 1970 年代に最盛期を迎えるが、当時の運動主流派にとって文化活動はほとんど重要視されず、運動の役に立つ手段として捉えられていた。しかし、野間や土方をはじめとする文化活動推進者は部落問題や差別を文学・文化によって世に広く問おうとした。それに呼応するかのようになり、多くの作家や活動家が彼らに賛同することとなり、文芸誌『革』は現在でもその活動を継続させている。部落問題を運動という場だけではなく文学・文化という場で問い直そうとするニーズがあり、その新たなニーズを創り出そうとする運動があった。歴史に埋もれてきた彼らの軌跡の重要性と部落問題を新たな形で問い直そうとする可能性を明らかにした。

結章では、本研究のまとめとして、研究課題と各部との関連性について論じた。運動内部で文化活動の重要性を説いた土方鉄、運動とは異なる場で表現活動を営んでいた部落女性たち、そしてそうした部落の書き手育成のために創刊された『革』、これらの営みには部落解放運動における公共性の問い直しを促す可能性があったと言える。